「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～ 第３回優秀賞作品

「不安は現代人に不可欠」

北京市 丁国強

日本の大地震とそれに続く放射性物質漏出リスクは、世界中に一種の不安を与えた。こうした不安は自然災害に対する恐怖からだけでなく、自らの運命の不確定さに対して内心から発しているものでもある。この極めて大きな自然災害を前にしても、日本人は不思議なほど落ち着きと余裕を保っているが、それで人々の内心の不安をごまかすことはできない。日本の周辺国では、買いだめ行為によって内心の不安を表す者が出た。中国人は食塩を争って買い、ロシアの極東地区住民はワインと食塩の買いだめに走った。こうした行為に科学的根拠は乏しいのだが、大勢になびきがちな人々は、盲目的にそうすることで自分の心を落ち着かせたのである。

世界はフラットである。日本の放射能危機は、災難は誰にでも関係するということを全世界の人々に教えた。文明が発展する過程において、人類は幾重もの不安の中にいる。そして、いつも、数え切れないパニックを経なければ、理性的に成熟した方向へ向かうことはできないのだ。不安をごまかすことはできない。不安は人類の魂の常なのである。人類が生き延びていくには、夢に酔いしれている訳にはいかず、自分自身と外界に関する全ての悪いニュースと直面しなければならないのである。不安は潜在的なものだが、必ずしも皆が慌てふためいている状態として現れるとは限らない。パニックは一時的なものだが、死に対する恐れ、究極の意味の追求はそう簡単には完成しないものである。人の自己設計はあまりに脆弱なので、試練を脱することができたとしても、内心の危機から抜け出せるとは限らない。人の安全感は反戦や秩序の維持だけによって得られるものではなく、心の充実と自己の完全性によって得られるものでなければならない。さもなければ、欲望が氾濫し、罪悪が流出することになるのだ。

人類の不安は一過性のものではない。連綿と、絶え間なく、微かに続いていくものである。不安は内在的なものであり、人類の心に源を発し、人の発展の不確定性と無限の可能性から来ているのである。現代社会では、自我の真実性が日に日に覆い隠されつつある。現代人は仮面で内心の不安を隠し、人生の不安を曖昧にすることに慣れてしまったのである。生きるストレスだろうと、精神的な危機や信仰の崩壊であろうと、不安は最も直感的なシグナルなのだ。不安の裏側は感覚の麻痺、硬直であり、無気力である。しかし、戦争、核拡散、環境汚染といった人類の限界を超える諸々の不安要素は、人類に壊滅的な打撃を与えている。不安は人類の宿命である。人々は不安の中で凡庸さに抵抗し、また極端な不安の中で郷里、生きていく場所を失っている。農業文明時代のロマン、詩情、温情は、既に埃に埋もれた記憶になっている。不安な人々は、再び昔を懐かしむことにより、ざわついた心を静めようとすることもできず、強い郷愁に幕を引こうとしている。現代社会はより複雑な不安心理を作り出した。この多元化した社会において“不安”の定義を決めることはできない。まして、安易に人格分裂、心理の変容とかいった名詞を使って、安易に表現することはできない。不安がより多い時とは、ある種曖昧な状態である。人々は自分の心にはっきりした境界線を引くことができない。欲望の膨張は危険だが、抑圧や煩悶も人を狂わせるのだ。

戦争、伝染病、環境汚染、乱伐といった人類文明に対する脅威は、目に見えるものである。野生動物の不安、不完全な境界の不安、森林や草原の不安、中東西アフリカの不安など、どの不安も他人事ではない。人類の不幸はしがらみが切れないので、整理しようとしてもできない。人類最大の脅威と不安は人類自身がもたらしたものが、災いは必ずしも邪悪を作り出した人物のせいではないという事実を、私たちは当然認めずにいる。価値が覆

り、人間性が見失われ、秩序が見えない時代、“悪貨が良貨を駆逐する”社会にあって、多くの不安はそうした邪悪な者、信用を失った者と腐敗した者から来ていることが多い。

日に日に拡大する不確定性と可能性のため、人々は立ち止まることができず、優雅に趣のある安住を求める勇気が持てないのである。不安は単なる一つの過程ではないのだ。人類文明は不安に始まり不安に終わるが、人生もまたそうしたものなのである。不思議によく変わるグローバル化の現実の前に、人々はそれぞれの形で不安を体験し、不安を問い詰め、不安に対抗している。被害が深刻な地区でも、逃げ出すことを拒む日本人は多い。彼らは不安を受け入れて冷静さに変えているが、理由はただ一つ「これも運命」ということである。こうした忍耐強さと冷静さは、特殊な自然、歴史、社会条件で形作られた民族性の発露であり、日本国民が長期に亘って試練や修行に耐えてきた結果である。一つの民族で最も重要な伝統は、苦難に向き合う態度である。学習することで苦難に向き合わなければ、生存し続けることはできないのだ。ここから言えるのは、平静は不安を認め受け入れた成果なのだということである。

不安は現代人に不可欠な精神的要素である。不安のせいで現代人は落ち着けずにいるが、忘れられた価値や意味を考えさせてくれるものでもある。不安があってこそ、畏敬、節制、慈善、哀れみ、信仰があるのだ。日本社会には念入りに作られた「災害対策マニュアル」があるが、今回の地震と津波の前にはまるで無力だった。技術には限界があるということだ。災難を受け入れる上で、精神力は無視できないのである。